

新年のご挨拶

吾郷 眞一 (国際平和ミュージアム館長)

明けましておめでとうございます。2020年という覚えやすい数の年であると同時に、21世紀も五分の一が経過したことを感じさせる数字でもあります。前世紀には世界大戦が2つもあって、その後も地域的な紛争は続きました。21世紀に入ってからも、その状況には好転する兆しが見えません。それどころか、昨今の世界情勢は紛争の激化、本格化の様相すら呈しています。そのようなときにこそ、平和博物館が持つ意味が大きいことを考えると身の引きしめる思いがあります。そのような状況の中でいよいよ、私たちのミュージアムもリニューアル計画が形を整えはじめ、2022年度の再生に向かって進んでいきます。そこには、現代の世界情勢を把握した上で、真の平和とは何かを考える素地を提供するものがなくてはならないと思っています。

2019年にもミュージアムは常設展の他に、「よみがえる沖繩1935」などいろいろな特別展示を行って好評を博してきました。その中に、催しではありませんが、ミュージアムにとって大きい意味を持つ賓客をお迎えすることができたことは、記憶にとどめておきたいと思います。それは、(2018年の特別展「ヤズディの祈り」林典子写真展で取り上げられたイラク北部の少数者迫害、を逃れた) ナディア・ムラードさんとともに昨年度のノーベル平和賞に輝いたコンゴのデニ・ムクウェゲ医師の来館です。

ムクウェゲさんは、自叙伝からもわかるのですが、破綻国家としばしば呼ばれるコンゴ民主共和国で、文字通り体をはって何万人もの性暴力被害女性を治療し、テロを告発してきた偉人です。立命館大学が名誉博士号を授与し、式典・記念講演会に出る前の時間を使って(本人の希望があって、と聞いていますが) 当館を訪れられ、私は直接にご案内するという貴重な機会を得ました。ミュージアムをかなり丹念に見て回られたのですが、質問が絶えません。しかも、私が国際法学徒であることを知ってから、質問は法と暴力に集中しました。突き詰めると、世界各地で起こっているテロリズム(戦争という「正規」の武力行使も含む)に対して法は何ができるのか、という質問です。人道に対する罪を問う国際刑事裁判所は、結局は国による執行が介在することから効果がなく、国連なども無力ではないかということです。私に向けられた追求のような気がして、国際法が戦争を制御するようになった経緯、国際人権保障制度の構築、SDGsのような経済社会協力を通しての平和創造など、苦し



紛れの対抗をしたのですが、私としても戦争の違法化という系譜は確かにあるが、核兵器の使用すら完全に違法化されていないこと、国際人権保障制度もまだまだ未熟であること、経済社会協力による平和創造もかなり時間がかかること、など、国家権力が厳然として存在し、法が力不足であることを認めざるを得ませんでした。とくに、ムクウェゲさんのような、国家権力やなまの暴力に邪魔(迫害)されながら、正義のために戦っている人の前では、どうしても自分の説明が空虚に聞こえてくるのです。

ノーベル平和賞だけでなく、他の多くの賞や名誉博士号などを受け、すでに世界的に業績が認められているとはいえ、命がけで医者としての使命を全うされているようなひとは、どのような方かと思っていたところ、非常に謙虚な、温厚な人柄で(私に対する質問も、本来は糾弾であってもしかるべきところ、なぜなんだろうという言い方をされるころなど) 感銘を受けました。さらに、力づけられたのは、平和は武力では達成されない、真実を伝えることができるというところに、本当の平和への道筋が描けるものである、その点でこちらのミュージアムは真実を伝えようとしているところに意義がある、という評価を下されたことです。自分の国では、事実をそのまま表現することはできない、という状況下でのご意見でしたが、私たちもコンゴほどでなくても事実を表現しにくい環境があることは、先般の愛知トリエンナーレ事件を想起してもわかります。一五年戦争の部分の展示を見て、すぐにそのようなコメントをされることもまた、立派だと感じ入ると同時に、勇気づけられたものでした。ムクウェゲさんの評価に堪えられる立派なミュージアムにしていきたいと思っています。

ミュージアムの収蔵品74 年賀状

「謹賀新年 一月一日」と書かれた年賀状です。水着姿の青年が画面の中、勢いよく飛び込んでいます。背後には、五輪のマークと3本の日の丸が並んでいます。これは、1940年の東京オリンピックの宣伝を兼ねた、1938（昭和13）年頃の年賀状です。

1940年の第12回大会は、日本で初めてかつアジアで初めての大会となるはずでした。1930年6月に当時の東京市長が、関東大震災からの復興を記念するためオリンピックを招致するとし、翌年東京市は、日本選手の競技力の誇示、帝都東京の繁栄、皇紀2600年の奉祝を目的として招致を決定。招致運動の結果、1936年に第12回大会の開催



年賀状 1938年頃

地が東京に決定しました。各方面の協力のもと皇紀2600年行事とともに準備を進めていましたが、東京市と大日本体育協会は競技場の選定などで対立、1937年7月に盧溝橋事件が起こり日中戦争が本格化すると、日本は東京大会を返上するという談議が新聞紙上でもささやかれるようになりました。1938年7月、国を挙げて戦時体制に備える中での開催は不可能と、閣議でオリンピックの中止が決定され、1940年の東京大会は幻のオリンピックとなりました。

(学芸員：兼清順子)

参考文献：坂上康弘高岡裕之編

『幻の東京オリンピックとその時代』2009年、青弓社



写真週報 第8号 1938年4月4日

競技場の準備や、景観の整備、外国人観光客を迎えるための外国語習得など、オリンピックに向けた準備の様子が紹介されている。

見学者のアンケートより

- 幅広く、各国それぞれの背景を踏まえつつ、学べる環境。ここで学んだ知識を多くの人、次の世代に知ってもらえるよう行動していきます。
(京都府・20代・立命館大学経済学部4回生)
- 第二次世界大戦だけでなく、ベトナム戦争や地域紛争の展示もあった。戦争のきっかけなども書いてあり、戦争同士のつながりなども知ることができた。平和とは何か、戦争など改めて考え直す機会となつてよかった。
(神奈川県・10代・高校生)
- 展示内容もとても具体的で、当たり障りのない内容ではなく、ミュージアムの立場を明確に示していると感じました。
(東京都・40代・大学教員)
- 昔、日本がどんなに辛かったかを具体的に知ることができました。戦争で亡くなってしまうことや、食べ物がなくて亡くなってしまうことに比べると、今がどんなに幸せかが分かりました。これからは、今の幸せを大切にしていきたいなと思いました。
(滋賀県・10歳以下・小学生)
- 白井久光さんが作ったおりづるが一番よかったなあと思いました。平和のために活動して作ったものだから。
(愛知県・10歳以下・小学生)
- 昔の生活様式の模型、多種にわたる資料が分かりやすかった。ガイドの方からとても詳しく丁寧に話をしてもらって、すごく勉強になった。特に、灯火管制の話は興

味深かった。爆撃の目標にされないためという理由があったが、照明弾があったためあまり効果がなかったということを知っているほどと思った。

(愛知県・50代・花屋)

- 「平和」は戦争がない事だけだと思っていたけれど、差別や環境問題も含まれているということに気づきました。昔の人の苦しみが分かった気がしました。

(高知県・10代・中学生)

- 昔のものがきれいに残っていると思った。戦争のことを改めて知って怖いと思いましたが、やっぱり昔があるから今があるので、昔の人が残してくれたものを大切に、次の世代へ受け継いでいくことが私達にできることだと思いました。

(高知県・10代・中学生)

- 植民地の抵抗運動が良かった。3人の兵士の方の様子を説明している点も良い。戦前の生活は、亡き父、母を偲んで見ました。加害と共に未来へ伝える姿勢に感銘しました。

(大阪府・50代・団体職員)



地階常設展示「戦争中の民家の復元」

ボランティアガイドコラム

ミュージアムのガイドは「展示物に則して」というのが鉄則です。そして当ミュージアムには戦争に関わるたくさんの展示物があります。これらの多くは1981年の夏に戦争の悲惨な記憶を風化させてはいけないと京都の市民によって始められた「平和のための京都の戦争展」のために集められたものです。

「京都と戦争」のコーナーの梅田義一さん、昌二さんの遺品もそのうちの一つです。おそらく当時は息子を二人戦争で亡くすことは珍しいことではなかったのかもしれませんが、しかし、二人も息子を戦争で喪った家族の哀しみを考えると胸が詰まる思いがします。また、戦時中はその哀しみを表に出すこともできず、心にふたをしておられたのではないのでしょうか。また、どの品もきれいに保存しておかれていた様子からは息子さんたちの思い出を大切にされていたことも感じられます。そんな思いをされたご家族がこれらの遺品を戦争展で展示し、自分たちと同じ思いをする家族を今後決して出さないために人々に（特にこれからの世代に）戦争の悲惨を伝えようと大事な遺品を提供されたことは想像に難くありません。

そんなご家族のお気持ちが伝わるようにこのコーナーをガイドしています。多くの方がうなずきながらガイドを聞いておられ、梅田さんの家族の哀しみを感じていただけているようです。海外にも似た話があるようで海外から来られたお客様にも共感していただけます。アメリカの方には五人兄弟が全員同じ船に乗っていたため一度に五人の息子を失った家族の話も聞きました。これは美談として伝えられているのですが、いくらヒーローとなっても家族の哀しみを万国共通なのではないのでしょうか。

よく戦争の被害を話す時に戦死者何万人と一言に言われますが、そこには亡くなった人の人数分の命と家族があり、その一つ一つに

哀しみがありません。決して一塊として考えるべきではないのではないのでしょうか。梅田兄弟の遺品から世界中の戦争で家族を喪った多くの家族の哀しみを感じていただければと思います。

(ボランティアガイド：幾波素代)



学生スタッフ 活動記録

今回は私たち2階展示学生スタッフの一日の業務について紹介します。2階展示学生スタッフの勤務時間は午前と午後に分かれています。

9時15分、開館時間の少し前に午前の業務が始まります。1階事務室でたくさんの新聞を受け取って二階に向かいます。一日の始まりの業務は開館作業です。展示室の扉を開け、空調を起動し、資料の補充、映像資料の上映などを行います。次に受付カウンターに座り、一日の業務の確認をします。団体の時間や人数、イベントの有無等を把握し、スケジュールに合わせて業務の見通しを立てます。開館時間になると受付業務が始まります。来館者がスムーズに入室し何かあった際にすぐに対応できるように準備します。それと同時に、事務室で受け取った新聞を読み、世界情勢や社会問題に関連する記事を切り抜きます。切り抜かれた記事は当館学芸員により選定され、各新聞社への申請・許可という段階を経て、「地球は今」という展示コーナーに掲示されます。

朝からの業務をしていると、団体の来館者がいらっしゃいました。平和創造展示室にご案内して展示のナビを行います。「戦争がなければ本当に平和なのか」という問いを現在の社会問題を例に考えていただき、そのための解決の1つとして活動している様々なNGO・NPO団体の活動を紹介します。そして京都にある平和に関する史跡を紹介し平和を育む活動を身近に感じていただきます。これら来館者の年齢や状況等に合わせて話し方を変え、よりわかりやすく伝えるように心がけています。

12時45分、午後の学生スタッフと勤務を交代します。その際に、スケジュールや、必要な業務の確認を行います。午後の業務は展示室の巡回から始まります。展示品に問題がないかを確認し、展示室の資料の補充を行います。NGO・NPO団体のリーフレットの補充、京都の史跡を紹介する平和マップの印刷をして設置します。

2階展示学生スタッフ編

個人の来館者がいらっしゃいました。二階展示室の案内が必要か確認し、適宜ナビを行います。戦没画学生の作品を展示してある無言館や、学生や市民団体等が企画して展示を行っているミニ企画展示室の案内を求められた場合はそちらに案内し、展示室の説明を行います。

16時30分になると、閉館作業が始まります。電気を消し展示室を閉めるだけでなく、来館者の方に来館して感じた平和への思いを書いていただいた「平和へのメッセージ」やミニ企画展示のアンケートを回収します。それらの書類を持って1階事務室に向かいます。最後に、書類を担当の職員の方に渡して明日の勤務のための準備を行ってから、一日の勤務を終了します。

今回は、2階展示学生スタッフの一日の業務について紹介させていただきました。来館した際は、ぜひ、2階展示室に足を運んでいただき、私たちにお声掛けいただければと思います。

(学生スタッフ：S)



**第128回 パネル・写真展「わたしをここからだして
-オリンピックの「治安対策」の名の下に入管収容所で苦しむクルド難民の現在-**

会期 2020年1月13日(祝)～2月8日(土)

主催：クルド人難民Mさんを支援する会 共催：立命館大学国際平和ミュージアム

展示内容 2020年東京五輪へ向けた準備が進む中、「治安対策」の名の下にクルド難民など帰国できない事情を抱えた人たちが、次々と収容所に入れられています。長期収容と帰国の強要によって心身を病む人も多い現状を伝えます。



破壊された家屋の前を歩くクルド人住民。トルコ東部・スル市にて
(撮影レフィク・テキン)

第129回 「こんなはずじゃなかった」

(第24回京都ミュージアムロード参加企画)

会期 2020年2月17日(祝)～3月21日(土)

主催：立命館大学国際平和ミュージアム 協力：京都新聞社、立命館大学地域健康社会学研究センター

展示内容 京都・西陣で地域、医療、老いと向き合ってきた医師・早川一光氏(1924-2018)。本展は戦後日本社会の中で地域医療に尽力し、老いと死を考え続けた早川医師の姿を紹介した「こんなはずじゃなかった」(松村和彦写真展、KG+ 2019 KYOTOGRAPHIE



SATELLITE EVENT) をもとに開催します。
2月29日(土)には、講演会を開催します。詳細はHPをご確認ください。

医師・早川一光さんの背中
(撮影松村和彦 京都新聞社提供)

遊心雑記

思いがけないこと

「表現の自由」は「表現の勝手」ではない。他人の人權を傷つけるような表現には配慮が必要だ—これは多くの人々の考え方でしょう。しかし、ある表現の適否が権力者の勝手な判断で決められるようなことは、好ましくありません。それは鑑賞者たちの相互批判の中で社会的に選択されるべきものだと、常々感じています。



左の写真は「慰安婦少女像」の無料配信画像です。このモチーフの表現は、先日「表現の不自由展」でも話題になり、そこに自治体の首長が表現の適否について自らの価値判断で裁くような行動をとったため、展示会が中止に追い込まれる事態を招きました。

平和博物館の中には、首長の歴史観・価値観に合わない「加害展示」が撤去されるという経験をしたケースもあります。したがっ

安齋 育郎 (国際平和ミュージアム名誉館長)

て、「表現の不自由展」の顛末は、私たちにとっても無縁の問題とは言えないでしょう。

あの事件からしばらくして、韓国の女性平和研究者を国際平和ミュージアムにお迎えする機会がありました。同先生は「被害と加害の両面」を展示している平和ミュージアムのあり方に、それなりに感じ入って頂いたようでした。

伺っているうちに、ミュージアム1階のロビーに展示してある「ムッチャン平和像」(右写真)が「慰安婦少女像」に通じる印象を与えた面があるようでした。私にとっては「思いがけないこと」ですが、人は知らず知らずのうちに、自分の問題意識で対象を見る傾向があることを改めて感じました。



2019年度 (2019年4月1日) より

休館日が月曜日から日曜日になりました。

学校単位でのご見学等、月曜日にご予定いただくことが可能になりました。

従来どおり祝日の翌日は休館です。

■ミュージアム概要■

開館時間：午前9時30分～午後4時30分 (入館は午後4時まで)

休館日：日曜日及び、祝日の翌日 (日曜日が祝日の場合は開館、翌日が休館)

年末年始・年度末の大学が定める休館日 ※詳細はHPでご確認ください。

見学資料費 (入館料)：大人400円 (350円)、中・高生300円 (250円)、

小学生200円 (150円) ()内は20名以上の団体料金

立命館大学国際平和ミュージアムだより



第27巻 第3号 (通巻79号) 2020年1月10日発行

編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL : 075-465-8151 / FAX : 075-465-7899

<https://www.ritsumeikan-wp-museum.jp/>



今後、特別展のご案内、ミュージアムだより等、国際平和ミュージアムより送付をご希望されない場合、また、送付先の住所変更等ございましたら、氏名・団体名、送付先住所、電話番号、FAX番号をご記入の上、国際平和ミュージアム (075-465-7899) へFAX送信ください。